

Title	想念(Konzeptionen)の論理 : 人間の言語性とその形成についての一考察
Author(s)	森田, 孝
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 3 P.63-P.81
Issue Date	1977-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/3564
DOI	10.18910/3564
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

想念 (Konzeptionen) の論理

一人間の言語性とその形成についての一考察一

森 田 孝

想念 (Konzeptionen) の論理

—人間の言語性とその形成についての—考察—

1. かつてリーブルクスが指摘したように、人間がその脱言語化現象に向かって、いちじるしい前進を遂げつつある現代のような時代においては、人間の言語性を問い、またそれへと教育することの意義を論ずることは、あるいは反時代的と見えるかもしれない¹⁾。

しかし、人間性が人間存在の言語性にその根源をもつことが、人間の脱言語化現象に伴う非人間化の危機のなかで、今日におけるほど明らかになった時代はかつてなかったのではないか。それは人間の歴史における逆説的な現象である。人間と言語、人間形成と言語性の、この根源的な関係への問いは、逆説的な意味において、もっとも現代的な課題であると言える。

今世紀の20年代に端を発する現代の哲学的人間学の展開——マックス・シェーラー、ハイデgger、プレスナー、ゲーレンなど——においても言語の問題は、まさにその中心課題のなかに現われたのであり、さらにはカッシーラーの『象徴的形式の哲学』や、ガーダマーの『真理と方法』において、言語への問いは、まさに哲学そのものの問題であった。

こうして現代における言語の問題が人間学的に問い深められるにしたがって、思想史におけるその源流がふたたび新たな光のもとに置かれ、その意義が問い直される。プラトンの『クラテュロス』をはじめ、アリストテレスやアウグスチヌスの諸著作、下ってはハーマン、ヘルダー、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトなど近世の思想家たちにおける言語論が、近年おびただしい文献のなかで研究されて来ている。そして今日、もっとも包括的な形では、それらとかかわりつつ、主として17世紀に成立し、18、19世紀における発展を経て、現代なおかなり多様な形において展開されている解釈学の新たな問題提起のもとに、言語—人間—その形成の問題が新たな考察の対象となってきたと言える。

本小論においては、今世紀20年代—30年代に現われたドイツの思想家ハンス・リップスの業績のなかに示された「想念」の問題をめぐって、現代の解釈学的視点のなかでリップスの言語理解がもつ意義を解明し、そこに人間形成論にとって極めて重要な知見を得ようとするものである。

2. さて、学術用語としては、かならずしも熟していない「想念」という語は、標題に示したように、Konzeption(en) というドイツ語に対する訳語である。それは日常的な生活の

なかでの人間と事物、また人間相互の間で、また人間と自己自身との間で、自然に形成され、獲得されるさまざまな日常的概念のことである。ハンス・リップス (Hans Lipps) は、この想念 (Konzeptionen) が言語の人間学的理解に対してもつ重要な意義を、かれの第二の著作『解釈学的論理学に関する諸研究』(1938年) において究明しようとした。

リップスの論点を述べるに先立って、これまで日本では、ほとんど紹介されることのなかったハンス・リップスという哲学者の波乱多く、また短かかった生涯と難解であるが極めて実り多いかれの著作について、ここで最少限度の紹介を試みておきたいと思う²⁾。

ハンス・リップスは、本名をヨハン・ハインリヒ・リップス (Johann Heinrich Lipps) と言い、1889年11月22日、エルベ河畔のピルナに生れた。かれの父方はフランケン地方の、母方はザクセン地方の家系であった。父は、醸造技師の子であったが蒲柳の質であったため技師になることができず、工場長を勤めていた。しかし、父は息子の誕生後すぐに死去した。母は高等裁判所判事の娘であった。リップスは一人子として、母の手によってドレスデンで育ち、当地の有名なクロイツ・ギムナジウムに学んだ。芸術家的にも自然科学的にも豊かな天分に恵まれ、そのため将来の自己の方向決定には迷いが強かったという。1909年、かれはミュンヘンで芸術史、美学および哲学を学び始めたが、第二ゼメスターには、この芸術史の講義にあきたらず室内装飾に変更し、さらに自分の求めるものを見出しえないままに、一時 T. H. で建築学を学ぼうとした。しかし自己の職業選択に、さらに時間的余裕を与えるために、1910—11年にドレスデンで兵役をすませた後、ようやく主として生物学・医学と哲学の研究に没頭することになった。すなわち、1911年にかれはエドムント・フッサールにつくためにゲッティンゲンに行き、当時フッサールやアドルフ・ライナッハを中心として形成されつつあった現象学派の集団に接した。のち1927年には、リップスの第一の著作『認識の現象学に関する諸研究』が現われたが、ガーダマーの記述によれば、「アドルフ・ライナッハの早死の後、若いリップスは、この実り多いゲッティンゲン現象学の最も有力な代表者となった」³⁾。

しかし、かれの哲学への道は平坦な道であったのではない。1911年以降かれは同時に生物学をも学び、1912年12月には「異なる媒体における植物の構造変化について」と題する論文で Dr. phil. を取得した。また同じ1912年の復活祭には、これと並行して医学の研究を開始し、1914年、医学研究の第5ゼメスターにはシュトラースブルクに移り、第一次大戦の始った同年8月から1918年11月まで、はじめは野戦補助医師として、後には大隊付医師として、ラザレおよび前線で戦争に加わった。戦場で、かれは哲学的探究を続けたと言われる。戦争終結後、かれはふたたびゲッティンゲン大学に戻って研究を継続し、医学の国家試験を終了した。1919年6月に医師開業免許を請求し、1921年3月には、「コルヒチン属第Ⅱ類におけ

る薬学的研究——二、三のコルヒチン誘導体の作用について——」と題する研究によって Dr. med. を取得した。

1921年7月、ゲッティンゲン大学で、「数理哲学の研究」と題する教授就任論文、「幾何学と経験」と題するコロキウム講演（後に文献4に収録された）、および「有機体の従属関係」と題する試験講義をもって、哲学部の数学・自然科学科における哲学の教授資格をえた。

以後、1923年までゲッティンゲン大学で私講師、1923年夏学期以後は講師委嘱、1928年員外教授、1928—29年の冬学期にマールブルク大学の哲学正教授に就任した。その間、1921—22年の冬学期の始め、および1930—31年の冬学期に、船医としてアジア旅行を体験した。（このとき日本の横浜にも上陸したことがあるという。）

1935—36年の冬学期にフランクフルト (a. M.) 大学に個人的な正教授として招かれ、1939年に同大学正教授となった。しかし、この時期も波乱多く、1939年9月の第2次世界大戦勃発時には、ふたたび軍医大尉として国防軍に配置され、フランスに出兵し、ロシアでの緒戦に参加した。しかし、この戦場にあった時期に、それまで素材のままであった論文を書き改めたものが纏められて印刷に付された（文献3）。

1940年1月—2月の3週間の休暇中、および1941年の1月—3月の3カ月の研究休暇中に、リップスはふたたびフランクフルト (a. M.) 大学で講義を行なった。そして同41年9月10日、ふたたびロシアに赴いたリップスは、大隊付軍医として客死した。

生前に自身の手で準備された上述の著作『人間の本性』は、出版時には同時にかれの訃報を巻頭に添付されなくてはならなかった。

歿後、それまでに発表されていたが散在していた諸論文が纏められて、1944年に二冊の書物として出版されたが、そのうち、言語哲学に関するもの（文献4）は、出版直前に戦火にかかり、僅かの部数を残して消失し、1958年に写真版による第二版が事実上始めて公刊された。

ハンス・リップスの数少ない著作は、次の通りである。

1. Untersuchungen zur Phänomenologie der Erkenntnis.

Erster Teil: Das Ding und seine Eigenschaften. Frankfurt a. M. 1927, 1976² (als Hans Lipps Werke I).

Zweiter Teil: Aussage und Urteil 1928, 1976² (als Hans Lipps Werke II)

(『認識の現象学に関する諸研究』第一部、物とその諸性質 第二部、言表と判断)

2. Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik. Frankfurt a.M. 1938, 1959², 1968², 1976⁴ (als Hans Lipps Werke II).

(『解釈学的論理学に関する諸研究』)

3. Die menschliche Natur. Frankfurt a. M. 1941.

(『人間の本性』)

4. Die Verbindlichkeit der Sprache—Arbeiten zur Sprachphilosophie und Logik—
Frankfurt a. M. 1944, 1958².

(『言語の拘束性——言語哲学および論理学に関する諸論文——』)

5. Die Wirklichkeit des Menschen. Frankfurt a. M. 1944.

(『人間の現実』)

ハンス・リップスの思想は、かれ自身の言葉で言えば、「プラグマティズムと実存主義との中間」⁴⁾を行こうとする、その独創性と、とくに言語をめぐる汲み尽くしえない深い思索ともかかわらず、かれの急な死と不幸な戦争のため、かれの歿後は十分に学界の注目をひくに至らなかった。リップスの思想の人間学的意義を早くから洞察し、これを忘却の暗闇から救い出して、とくにその言語に関する深い思想を現代における新たな展開へと媒介する努力は、ただオットー・フリードリヒ・ボルノーによるものであったと言える。ボルノーの諸著作、とくに『生の哲学』、『言語と教育』、『認識の哲学』、『真理の二重の顔』などの著作、また数多くの論文、書評において、くりかえしリップスの名が挙げられ、その意義が解明され、またある意味では、なおその実存的理解の狭小さが批判的に克服されようとしている⁵⁾。

3. さて、ハンス・リップスの第一の著作は、かれが、1916年までゲッティンゲンで教えたフッサールの弟子であることを端的に示したものであり、ハイデッガーの『存在と時間』と同年に出版されている⁶⁾。すでにこの書のなかでリップスは、かれ独自の基本的な方向、すなわち論理学や認識論の抽象の世界から決定的に具体的世界へと問題提起の方向を転換せしめるという試みを明確に示しており、その意味においてプラクシスの世界に優位をおくのである。かれは書いている。「事物との、このような交渉の基礎の上にはじめて、あるものが〈即目的に〉何であるかが、とらえられうる (konzipiert werden kann)」⁷⁾ (傍点筆者)と。

ボルノーは、当時、20年代および30年代にゲッティンゲンを中心として展開された、このような問題提起のなかに含まれている二つの方向を次のように述べている。第一の方向は、生動的な生の諸要求を満足させるように概念を作りかえうるかを問うという方向であり、たとえばベルグソンが試みたように、「流動的な概念」の可能性を問うことである。もう一つの方向は、概念はそのままに「さしあたり与えられたものとして受取り、……概念が、より大きい生の連関のなかで果すべき機能を問う」⁸⁾という方向である。それはやがて言語を生る哲学の立場から問うことであり、また哲学的人間学的に考察することの要求である。リップスが第二の著作のなかで「解釈学的論理学」の名において要求したものは、まさにこの第二の方向につながっている。ボルノーは、この解釈学的論理学の基礎づけのために努力し

た三人の哲学者、ゲオルク・ミッシュ、ヨゼフ・ケーニヒ、そしてハンス・リップスの仕事を簡略化のために「ゲッティンゲン学派の論理学」と名付けた⁹⁾。

ゲオルク・ミッシュについては、今日のところ、その著書『Lebensphilosophie und Phänomenologie—Eine Auseinandersetzung der Diltheyschen Richtung mit Heidegger und Husserl— (2. Aufl. Leipzig und Berlin 1931)』があるが、かれの未刊の講義録『論理学と知識論序説』(1928—29)¹⁰⁾において、ミッシュは、論理学の人間学的な、生の哲学からの考察を要求し、論理的形式の発展を「人間が人間にまで生成してゆくなかで思考形式が展開してくるプロセスとして」¹¹⁾把握しようとした。

また、ケーニヒは『Sein und Denken—Studien im Grenzgebiet von Logik, Ontologie und Sprachphilosophie— (Tübingen 1937)』のなかで、まさにここに合流するさまざまな問いの収斂点を示した。

ハンス・リップスは、この翌年、1938年に、かれのそれまでの研究を纏めて『Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik』として発表した。これら三つの著作の標題を見ただけでも、ボルノーが言うように、「このような生の哲学による（あるいは人間学的な）論理学の基礎づけ」が、当時まさに成功しえたであろう「稀有な時」があったが、不幸な戦争がこれらの研究を挫折させ、中断させてしまったのであった¹²⁾。

さて、われわれはとくにリップスにおける言語論と解釈学的論理学との関連について見なくてはならないが、それに先立って、そもそも解釈学とは何であり、どのようにして成立するにいたったのかを簡単に振り返っておくことにしよう。

4. 解釈学 (Hermeneutik) という語は、すでに17世紀に古典ギリシアに範をとった造語として用いられ始めたものであるが、この解釈学が現代において解釈学的論理学という形をとり、さらに最近では哲学的解釈学と呼ばれたり、また教育学においても解釈学的教育学について語られるに至っている。

Hermeneutik という語は、神の使者であるヘルメース (Ἑρμῆς) に関連していると考えられ、古い例ではプラトンの『エピノミス』(法律後書)において、人間の知識や技能が列举されるなかに並べて言及されているのを見ることができる。そこでは、解釈の術というのは、真理そのものを判定するのではないが、神話を解明し、神々を解釈する術として取り上げられているのである。神々からの知らせ、神々の言葉が、暗く不可解な言葉として解釈を必要とするとき、それは hermeneia, または kommentare と言われたのである。そして神々の言葉のみならず、一般に言葉が hermeneia であり、また interpretatio であると考えられるとき、アリストテレスの『オルガノン』におけるように、「Περὶ ἑρμηνείας」ないし「De interpretatione」という学科が成立することも容易に首肯されるであろう。ここで ἑρμηνεία

とは、一般に表現、ないし命題のことであり、表現論または命題論とは話すことのみならず、さまざまな仕方を探究するものと考えられた。

こうして、ヘレニズム世界においてすでに論理的諸技能 (*τέχναι λογικά*) としての *grammatica*, *rhetorica*, *dialectica* との密接な連関のなかで形成された解釈術 (*ars interpretandi*) が、ギリシア世界のラテン語世界への導入、ユダヤ・キリスト教世界の伝統とヘレニズムのアレゴリーとの対決、ローマ法、ギリシア文学の西欧世界への伝達努力などを通して、やがて17世紀における「解釈学の成立」に結びつくことになる。宗教改革における、聖書をそれ自身から解釈することへの要求に結びついて、解釈術は解釈学として新しい課題意識のもとに整備されたと言われる。やがて19世紀前半に、フリードリヒ・シュレーゲルとシュライエルマッハーによって、解釈学は諸学——たとえば神学、文献学、また法律学——の補助学科としての従属的な地位から解放されて、「有意義な歴史的生の客体化の了解と解釈についての普遍的理論」となった¹³⁾。

このシュライエルマッハーの業績を受けつぎ、さらに解釈学の学的整備を大成したのはディルタイであった。ディルタイは、そもそも、かれの研究を解釈学についての業績から出発させたが¹³⁾、1900年に発表された『解釈学の成立』¹⁴⁾のなかで、シュライエルマッハーにいたるまでの解釈術および解釈学の発展を簡潔かつ明確に示した。しかし解釈学は自明で平坦な道を歩むものではなく、いわゆる循環の問題をはじめ、学として成立するための困難を伴っている。ディルタイは、いわゆる『手稿』¹⁵⁾のなかで、解釈学がもつ特異な運命について、次のように述べた。「この〈解釈学〉という学問は、特異な運命をもってきた。この学問は、つねにただ特異な歴史的な存在に対する、このような理解のしかたを学問の緊急要件たらしめ、あとはふたたび暗闇のなかに消えうせてゆく歴史上の大きな動きのもとで、ひとの注目をひくにすぎない」¹⁶⁾と。そしてディルタイは、このような歴史上の大きな動きとして二つものを挙げている。一つは上述した17世紀における聖書解釈がプロテスタントにとって死活問題であった宗教改革であり、もう一つは、19世紀における歴史的意識の発展であった。しかし、「この学問のなかで動いていた問題は、今日新しい、もっと包括的な形をとって、ふたたびわれわれの前に立ちはだかっている」¹⁶⁾。すなわち、解釈学が、「了解の認識論的、論理的、方法論的分析」のなかに、「精神科学を基礎づけるにあたっての、主要な課題」¹⁶⁾を見出すならば、「解釈学は、今日の学問を動かしている、精神科学の構成根拠という大問題と内面的な関係を結ぶことになる。解釈学の問題と命題とが、生きた現在となる」¹⁷⁾とディルタイは書いた。

ところで今日、ディルタイの命題以後すでに70数年を経て、解釈学の意義と運命についてのディルタイの言及は、ポエゲラーとともに言うならば、「けっして、それを最後に消えさる終りではなくて、むしろ新しい始まりであった」と言ってよい¹⁸⁾。

かつてテキスト解釈の特殊な技術として出発した解釈術は、「人間の生存の、文書に含まれている名残り」¹⁹⁾を解釈するという人間の生の解釈学へと拡大され、さらに、書かれた文書にとどまらず、およそ「世界をそれ自身から解釈すること」、人間の生の「意識されていない諸根源を開示すること」へと深化されるのである。こうして特定の学問の特別な領域に限定されて形成されきたった方法が、人間の生の容体化の全体に、さらには生そのものに適用され、哲学的方法一般に拡大されるにいたった。

5. さて、ハンス・リップスは、さきに示したかれの著作の随所で言語への考察を深めた。第二の著作の冒頭で、かれはアリストテレスの「Ἔστι δὲ λόγος ἀπᾶς μὲν σημαντικός」という発言を掲げて、これに対するトレンデレンブルクの訳文「Jede Rede dient zur Bezeichnung」に満足せず、自ら次のように解釈している。「Jeglicher λόγος ist nun offenbar insofern σημαντικός, als in jedem gesprochenen Wort etwas gemeint ist」(あらゆるロゴスは、あらゆる話される語のなかで或ることが意味されているかぎり、明らかにセマンティコスである)²⁰⁾。セマイネイン (σημαίνειν) とは、誰かに或ることを示すこと、であり、そのようなロゴスをリップスは λόγος σημαντικός (だれかに或ることを示すものとしてのロゴス) と呼ぶのである。

リップスは哲学的、ないし解釈学的論理学を伝統的な形式論理学に対比せしめつつ、「分析的に体系としての論理学を展開するかわりに、そのアインザッツ (発端) そのものを反省的に把握する」²¹⁾ことを求める。このアインザッツにおいて「原理」として固定しようと信じられたものは、どこまでも「事実上は生動的な遂行・成就のなか (in dem lebendigen Vollzug) 勾留されている」²¹⁾。こうして「判断の形態学の代りに論理学は語りの類型学 (eine Typik der Rede) を展開しなくてはならない」²²⁾のであり、「判断の形態学を……そのなかで実存が遂行し成就する (sich vollziehen) 歩みの類型学 (eine Typik der Schritte) で置き換えることが重要なのである」²³⁾という。すなわち哲学的、解釈学的論理学にとっては、「後から対象化すること」ではなくて、いつでもアクチュアルな遂行・成就のなかでのみ見られるような「能動的な思考状況」²³⁾が問題だというのである。それがロゴス・セマンティコスと呼ばれたのであった。つまり、ここでは「人間にとって言語とは何であるか」が問われるのであり、言いかえれば、言語は人間の具体的な生においていかなる機能を果たすべきかを問うのである。

こうしてリップスは、「確定された形象物の背後にまわって生動的な遂行にまで遡り、前者を後者のいとなみとして理解する」²⁴⁾という一般的哲学的なアプローチのなかにいるのである。それは一方ではミッシュの生の哲学の立場に接近しているようにも見えるが、他ににおいて、リップスは同時にハイデッガーの実存哲学からの問題提起を深く受けとめていること

に気付かれるのである。ハイデッガーはその『存在と時間』のなかで、「けっきよく哲学的研究は一度は、およそ言葉にはどんな在り方が属するかを、思い切って問わねばならない」²⁵⁾と述べ、「この〔人間という〕存在するものは、世界と現存在自身を発見するという仕方において存在する」²⁶⁾ことを、ギリシア人のロゴス（それは本来、語り Rede である）を導きの糸として解明することを要求したからである。

さて、ここでリップスにとって決定的な区別として、かれが自明なこととして採用している一つの根本的な区別、すなわち〈自己-存在 (Selbst-sein)〉と〈事物 (Sache)〉との区別が指摘されなくてはならない²⁷⁾。事物的なものの領域は客観的につかみうるものの領域であり、その成果は「知識として供託する (als Wissen zu hinterlegen)」²⁸⁾ことができる。ここには一般に、生動的な遂行から切り離される²⁹⁾「認識の在庫」³⁰⁾がある。リップスは、この領域をハイデッガーの「内世界的なもの」³¹⁾という概念を用いて言い表わしてもいる。そこから、さらに即物的な態度 (das sachliche Verhalten) と言われる場合、ここで sachlich という語はボルノーが注意したように、内容的には副詞的に使用されているのであるが、そのとき、この態度ないし行動には、ある本質的なものが、すなわち「人間の、関連づけられており、関与しているという内的な存在 (das Einbezogen-Sein des Menschen, sein inneres Beteiligt-Sein)」が見失われがちであることに注目しなくてはならない。もちろん、そのような態度は、ある状況のもとでは適切であり、必要であるが、それが人間の生活態度の全般へと、その特定の状況を超えて拡大されるとき、この「即物的な態度」という表現にはリップスによって批判的な意味が籠められるのである³²⁾。

こうして他方において、人間を人間として問題とする場合、人間の自己-存在、リップスがハイデッガーに依拠して言うところの〈実存 (Existenz)〉が、事物の領域に対立して現われる。

しかし、このことは、ボルノーが適切に指摘したように、ただ自己ないし実存がいわば切り離すことのできる第二の領域として、事物の領域に並べて考察されうることではない。そうではなくて、「自己は、リップスとともに言うならば、世界のなかに分離しがたく『交差させられて』いるがゆえに、この区別は、ただ関連の異なる仕方の問題なのである。すなわち、『事物性 (Sachlichkeit)』とは、この自己を忘却して世界のなかへと立ち現われること、世界によって捉えられてあることであり、したがって実存がそこで実現される、本来人間的な態度なのである」³²⁾。こうして、「世界における態度ないし行動は、『自己自身へといたる歩み (Schritt zu sich selbst)』³³⁾として、まさにその責任のもとに起こる」というリップス独自の表現法が成立するのである。「実存は歩みのなかで遂行され成就される (Existenz vollzieht sich in Schritten)」³⁴⁾。人間はいたるところで、世界に対する態度ないし行動のなかで、たとえば言語のなかで³⁵⁾、また認識のなかで³⁶⁾、また単に見るといふこ

とのなかで³⁷⁾、自己自身を実現するのである。

リップスが解釈学的論理学というとき、そこではまさに以上に述べたように、抽象的な論理形式から、この実存的に遂行され、成就される歩みへの還帰が考えられていたのであった。そのことは、かれが「根源を解明すること」³⁸⁾、また「解釈学的に見出されるべき先取」³⁹⁾、「後から解明される自明性」⁴⁰⁾について語る時、看取されるのである。

6. 以上に見たようなリップスの思想の最も重要な問題を解明する具体的な手がかりを与えるものが、かれの独自の想念 (Konzeptionen) の概念である。この想念の隠れた論理を明らかにすることによって、人間の言語性が自己存在としての人間の根源に迫って明るみに出されうると考えられる。

ところで、想念とは何か。リップスは、想念を「そのもとに包摂作用が起ることの概念 (Begriffe, unter die subsumiert wird)」⁴¹⁾とは区別している。想念とは、伝統的論理学のいう概念ではなくて、したがって特定の表象をもち、明確な徴表と結びつけて定義され、明確に規定されうるものとしての概念ではなくて、したがってまた「事実知」として判断するわたしを捨象したところに成立する即事的、即物的な対象としての概念ではなくて、「その先行性において、まだ気付かれていない」、「自己自身への途上」にある「先取」であり、「前決定」であって、「けって規定作用であろうとはしない」「日常生活の諸概念」⁴²⁾である。このような想念が、日常生活の諸概念のなかで、実存の生動的な遂行として、ひそかにわれわれの了解を指導している、というのである。

「このような仕方では、ひそかに指導しているものにおいて、ひとはただ後から現場を押さえることができるのみである。こうして、ひとは、それへの途上にあるもののかたわらに潜んでいる (Bei dem, was in dieser Weise unter der Hand leitend ist, kann man sich nur nachträglich betreffen. Man steckt dann bei dem, wozu man unterwegs ist.)」⁴³⁾。この意味において、「解釈学的に見出されるものは、それ自身においては、その先行性においてまだ気付かれていない (Was aber hermeneutisch gefunden wird, ist an ihm selber in seiner Vorgängigkeit unbewußt)」⁴³⁾と言われるのである。言いかえれば、解釈学とはあとからの内省の一形式であり、それがはじめて、無意識のままに指導しているもの、先行する先取り (Vorgriff)、語のなかに潜む前理解 (Vorverständnis) を明らかに取り出すのである。認識にとっては、いかなる無前提の始まりもなく、すなわち、いかなる「アルキメデスの点」もないのであり、無意識のままにすでに理解されているもの、いわゆる「前理解」があとから明瞭にされるのである⁴⁴⁾。それは直接的に内省によって確定されるというのではなくて、「行為そのもののなかに目撃される」ほかはない。そして、そのことを可能ならしめるのが「想念」なのであった。

人間が生活のなかで、何らか直接に事物とかかわりをもつとき、人間はいつでもその事物を何らかすでに知っている。こうして、やがて人間はそれを意識的に知覚し、また、あるものとして「取り扱う」ことができる。「想念」としてわれわれがあとから気付くものは、実はまずこのような事物と人間との直接のかかわりであり、「交際性」⁴⁵⁾である。そうして実は、このような想念こそが語の根源的な姿である。リップスは言う。「あるものをよく知る (etwas erkennen) とは通常、それをうまく成就する (damit zurecht kommen) というほどの意味である」⁴⁵⁾と。すなわち、それにかかわり、「交際しうる (damit umgehen können)」⁴⁵⁾というほどの意味だという。理論的態度に比すれば、いわば行動的、実践的な生活の態度において想念は成立する。「わたしが事物を取り扱わなくてはならない限りでの、たとえば観察しつつそれを取り扱うとか、それを視点のもとにおくとかいう交際性のなかで、それら〔の事物〕はそれらが現にあるものとなる。それらをとらえる (begreifen) とは、それらを……として受取ること (als …… nehmen) である。おそらく抵抗を受取り、こうしてそれらをうまく処理するというように。想念が進行を媒介する。それは、ひとがそれを用いて、あるものを捉えるべき巧妙な、自分のものとなったこつ (gekonnte Griffe) であり、ひとはそれのなかに自ら手がかりを得るのである。事物は、ひとりでのではなく、わたしから自らを示す——一定の意図の反映のなかで、実存が自らを企投する可能性の鏡のなかで」⁴⁵⁾。

ここで二つのことがらに注意すべきであろう。すなわち、一つは、想念のなかで、いわば人間と事物との直接的な交際が可能であるということ、そこには確かな手ごたえが可能である。しかし、その場合でも、その交際のなかで事物はただ素朴に事物そのものとして、事物の側から現われるのではなくて、わたしの側から、わたしの意図の反映、わたしの実存の企投に応じてのみ姿を現わすということである。

つまり、「このような想念は、ただこつとしての遂行においてのみ存在する (Diese Konzeptionen gibt es nur im Vollzug als Griff.)⁴⁵⁾」のである。ということは、想念は、「それのもとに包摂作用が起こる、あの表象的な概念のように持続的なものとして持ち出されることはできない」ということである。それは、「場合によっては、おそらく直観化されることもできよう」⁴⁵⁾が、根本的には「ただ諸例のみが、このような想念を受容せしめうるのである。すなわち、それら〔の諸例〕が……全体をまとめて見る場合、一般的に言えば、何ごとかに対して構成的であるような、いろいろな関連事項を活性化する場合に指導的となる観点をひそかに受け入れさせるということによって」⁴⁶⁾。

概念が相集って、一つの理論的な体系をなす場合ではなくて——もちろん、個々の科学は明確に定義されうる概念によって構成された体系的構造を成すが——、日常言語の広範な理解領域においては、想念である概念が、そのつど特殊な仕方では、「現実のなかへと掴みひろげる」⁴⁷⁾のであり、定義された概念体系や伝統的な概念ピラミッドをモデルにした言語理解

に対して、生動的な想念における言語理解がいちじらしい対照をなすのである。

7. 前項において見た想念は、いわば世界との行動的な交渉において生ずる実践的の想念であるが、さらにリップスは、もう一つの想念の種類、すなわち、理解そのものに対して指導的な影響を与える想念、「篩にかけるように選り分ける想念 (sichtende Konzeptionen)」⁴⁸⁾ について語っている。「言語のなかには、ただ実践的な想念であるだけでなく、篩にかけるように選り分ける想念である勘どころ〔摺み所〕(グリッフエ) が、あらかじめ形成されている」⁴⁸⁾。

リップスがまさに諸例を用いて解明しているところに聞こう。たとえば、「ひとはピアノを弾いたり(シュピーレン)、トランプをしたり(シュピーレン) するが、また他の人と遊び(シュピーレン)、また金を賭けて勝負する(シュピーレン)。いろいろな可能性のはたらく余地(シュピール・ロイメ) があるなどという」⁴⁸⁾。「本来、この spielen とは何くであるのかは、ただその具体的な変化をずっと通して見ることににおいてのみ、感じ取られうるのである。ここでは動詞的な語源のなかに、きわめて相異なるものを捉えうるための言語的可能性がもち込まれている。それが言葉の光のなかで示される。それが言葉の光のなかで何か解釈し込まれるのである」⁴⁸⁾。(spielen というドイツ語の例を、われわれは、たとえば「たつ」という日本語の例で置き換えて、同様のことを考えうるであろう。「席をたつ」、「椅子からたつ」、「とげがたつ」、「優位にたつ」、「腹がたつ」、「役にたつ」、「目算がたつ」、「目にたつ」など。)

ここでリップスは、きわめて相異なるものが、さきの例で言えば「Spiel」が現われたさまざまなものが、Spiel という「顔 (Gesicht) を獲得する」⁴⁸⁾ と言っている。それらはいわば、家族的な類縁性をもつのである。このような類縁性をもつものとして「語はここにおいてオルガノン (ὄργανον) である」⁴⁸⁾ と言われる。いわば想念が似たものを選び取るのであり、語はここでは素朴な意味での模写的な機能を全くもたない。「ここでは語が理解を支配する。そして、この摺み所 (グリッフエ) において言語の潜在力 (ポテンツェン) が前面に現われるかぎり、それらの摺み所は〈自分のものとなった (gekonnt)〉のである」⁴⁸⁾。

このような言語理解の背後には明らかにヴィルヘルム・フォン・フンボルトのいわゆる言語の世界のみかた (Weltansicht der Sprache) についての考え方があ

さて、リップスは上述において見たように、言語の根源的な機能を、「篩にかけるように選り分ける想念」に見出したが、われわれはそれをボルノーとともに⁵⁰⁾、実践的の想念から区別して言語的の想念と呼ぶことにしよう。もちろん実践的の想念と言語的の想念は画然と分けられるものではなく、むしろ或る程度相互貫入的な関係に立つ。また他方、明確に定義された人工的記号体系とも区別されるとともに、どのような厳密な人工的定義の背後にもここに述べ

られたような自然言語における言語的想念の世界がその理解を支えていることを注意しておかななくてはならない。このことは教育学的にも極めて重要な帰結をもつが、今はその問題にただちに立ち入らないでおこう。

この言語的想念の領域では、語義は一義的に与えられえないから、すべての語の意味はあいまいであり、多義的であると言わなくてはならない。そして想念ないしは日常的概念における、このような多義性、あいまいさは、もしもまったく異質な見方、語はあらかじめ存在し、現前している現実を再現せんとするものだとする、単純な模写機能において見ようとする見方からすれば、致命的な欠陥と思われるであろう。しかし言語的想念のなかに、真に事物を解明し、新たな理解の世界を創り出し、同時にまた人間の自己形成の力を見出す観点に立つならば、事情は全く別である。

ここでは、問題はどこにあるか。『言語と教育』においてボルノーが述べているように、「語の適用のさまざまな可能性の目録を作って、その語の明確な意味の代用にするというのではまだ十分でない。そのような適用の可能性を一つの言語的想念のうちに取りまとめるような概念的には示しえない中心を把握すること、そしてそのような方法の『解釈学』を取り出すことが必要である」。⁵¹⁾「概念的に把握しうる、どのような固定化の試みによってもその本質は捉えられない」⁵¹⁾とボルノーは言う。かれは、ここで、まさにリップスによって深められた言語理解と一致して、言語の本質を次のように見定めようとする。「言語をその生活機能全体においてみるならば、すなわちそこにおいては、われわれの世界がすでにいつでも解釈されており、われわれの理解がすでにいつでも指定され、導かれるような、創造的な精神的遂行、ないし成就として言語をみるならば、たちまちこのような『あいまいさ』は言語の最内奥の本質に属しているということ、それがはじめて言語の、より微妙なはたらきを可能にするのだということをひとは認めざるをえなくなる」⁵²⁾。

厳密な定義の可能な、また必要な言語の領域は人間の言語生活のむしろ比較的にかさい部分を含みうるにすぎないのであり、他のより広範にわたる人間の言語生活の領域において、「細分化された課題に見合う、言語的精確さの形式を見出すこと」⁵²⁾が重要である。

8. さて、しかし、われわれはここで、上述の論点のなかにひそんでいる一つの問題点に注意しなくてはならない。リップスが好んで、実存が「自己を遂行し、成就する (sich vollziehen)」⁵³⁾とか、実存が想念において、「わがものとなった巧妙な攪み所 (グリッフェ) におけるように自己自身を遂行し成就する」⁵⁴⁾、さらには「実存は一步一步の歩みのなかに自己自身を遂行し成就する」⁵⁵⁾というとき、この Vollziehen (遂行、成就) という概念で何が言われようとしているのか、ということである。ボルノーはそこに、「一方では、実存哲学の人間理解の一般的基盤の上に生じた実存の解釈が、この遂行の概念によって入り込んでき

ているが、この人間理解は、リップス独特の仕方で変容されている」⁵⁶⁾ことを指摘する。

この点に関するボルノーの批判点をもう少し見ておこう。「遂行する」という語は、その慣用語法の分析（もちろん、ここでボルノーはドイツ語の vollziehen について行なっている）が示すように、いつでも「あらかじめ指定されたものの実行ないし充填」という特徴的な意義をもっている。それはいつでも「はじめから、その行為の形式を規定する」。したがって、自発的な行為（たとえば、笑いか怒りのような表現運動や、道具の製作、散歩などの目的運動）は、いずれも「遂行され、成就される」とは言えない。ボルノーの分析の示すところによれば、遂行され、成就されるのは、いつでも何か祝祭的なものであり、儀式的なものである⁵⁷⁾。

このことからボルノーは、リップスが「実存の遂行」というとき、祝祭的な行為ではないにしても、「実存の本質、そこに遂行され、成就されるべきものが、あらかじめ前もって規定されていて、人間の行為は、創造的な展開という意味で、この本質の産出または増大に関与しているのではなく、ただ、この最初から無時間的に前もって与えられている本質、すなわち実存を実現するという課題をもつにすぎない」⁵⁷⁾と鋭く指摘する。これはかつてボルノーが『気分の本質』において、ハイデッガーの決断における完結性に対し、また一般に実存の自己完結性に対してすでに提起してきた問題でもあった。「生の哲学のいう意味での『生』とは異なって、実存はその本質において増加もせず、また変化もしないで、ただ、たえず新たな努力のなかでだけ実現されうる或るものである」⁵⁷⁾。

もしも上述のように考えるならば、前理解を導く想念もまた、同じ問題状況のなかにおかれていると言わなくてはならない。つまり、そこに示される前理解は人間に対して何か不変のものとして前もって与えられていて、語の使用のつどに具体的に充足され、さきの実存と同じような仕方ですべて「遂行され」るべく、あらかじめ、前もって決定されていると考えられるという状況である。少なくともリップスの実存モデルにしたがって理解するかぎり、一方で、そのように考えざるをえないであろう。

すなわち、ここでの問題は閉じた前理解と開いた前理解との区別に関する問題である。想念が前理解を導き、フンボルトの表現を用いれば、いつでも人間は「言語が対象をかれに供給するかぎりにおいて」、「対象とともに生きており」、人間は言語のなかに「紡ぎ込まれて」いて、いわばその「円環」のなかに逃れがたく閉じ込められると考えるとき、そこにはボルノーの意味での「閉じた前理解」が成立する。「この見解によれば、人間は何ら新しいことを経験しえないということを意味しているのではもちろんない。しかし、この新しいことは、いつでも前理解が準備している媒介によってのみ把握されるのである。前理解そのものは変化しない。それはつねに同一の世界の枠組を描く。生起するすべてのものは、この世界のなかで生起するが、世界そのものは変化しない。人間は実際かれの移ろいえない前理解の檻の

なかに閉じ込められている」⁵⁸⁾。

しかし、ここで想念における「開いた前理解」の可能性が求められなくてはならない。さもなくば人間はただ「過去に引き渡され、未来の新しい、あらかじめ予見されなかった、また予見しえない、さまざまな可能性への開放性をまったくもたないことになるだろう」⁵⁹⁾からである。

想念は同時に、「世界を開き、近づきうるものにする」「言語の開示的機能」において見られなくてはならない。想念における前理解は、ただ、あらかじめ与えられた不動の確立した理解ではなく、その意味において、「世界の見方 (Weltansicht)」は、けっして完結した「世界像 (Weltbild)」ではないのである。

言語を人間にとっての言語機能から見るとき、言語は人間にとって変転するものである。それは客体的なシステムとしての言語が、言語学者の注目を引く意味で超主観的に緩慢に変化する変形のことではなくて、一人ひとりの人間が言語と取り組み、それを身につけ、人々と語り合い、多様な形態をもつ対話のなかでの試練を経て、現実を新たに掴み、また言語を増大し、理解を深めてゆく、まさに解釈学的なプロセスのことを言っているのである。それは同時に人間の言語性の形成のプロセスと言ってよい。

1) Bruno Liebrucks, *Erziehung des Menschen zur Sprachlichkeit*, in: *Zeitschrift für Pädagogik*, 7. Beiheft. 1968. S.27 ff.

2) リップスの伝記については、数少ない資料のうち下記 (とくに i) を参照した。

i) Nachwort von Evamaria von Busse, in: Hans Lipps, *Die Wirklichkeit des Menschen*. Frankfurt a. M. 1954. S.206-219.

ii) Vorwort von Hans-Georg Gadamer, in: Hans Lipps Werke I. Frankfurt a. M. 1976. S. VII-XI.

また、ボルノー教授の談話から補った箇所もある。なお、注5)の文献5, 6, 7をも参照。

3) Hans-Georg Gadamer, a. a. O. S. IX.

4) Hans Lipps, *Die Wirklichkeit des Menschen*, 1954. の第三論文: *Pragmatismus und Existenzphilosophie* (1937) を参照。

5) 単行本としては、

1. Otto Friedrich Bollnow, *Die Lebensphilosophie*. Berlin-Göttingen-Heidelberg 1958.

2. Derselbe, *Sprache und Erziehung*. Stuttgart 1966.

3. Derselbe, *Philosophie der Erkenntnis. Das Vorverständnis und die Erfahrung des Neuen*. Stuttgart 1970.

4. Derselbe, *Das Doppelgesicht der Wahrheit. Philosophie der Erkenntnis*. 2. Bd. Stuttgart 1975. 論文としては、

5. Otto Friedrich Bollnow, *Zum Begriff der hermeneutischen Logik*. (以下 BHL と略記する)
In: *Argumentationen. Festschrift für Josef König*. Hg.v.H. Delius und G.Patzig. Göttingen 1964. S.20-42.

(*Hermeneutische Philosophie*. Hg. v. O. Pöggeler. München 1972. S.100-122. に再録)

また書評としては、

6. Derselbe, Hans Lipps. *Die menschliche Natur. Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie*. 8. Bd. 1942, S.229-235.

7. Derselbe, Hans Lipps. *Die Verbindlichkeit der Sprache. Die Sammlung*. 1. Jg. 1945/46, S. 689-699.

6) もっと詳しく言えば、この『認識の現象学に関する諸研究』第一部の完了後、第二部の出版前に、

ハイデッカーの『存在と時間』が発表された。第二部の Vorrede を参照のこと。

- 7) Hans Lipps, *Untersuchungen zur Phänomenologie der Erkenntnis*.
- 8) O.F. Bollnow, BHL., S.21.
- 9) O.F. Bollnow, BHL., S.23.
- 10) O.F. Bollnow, BHL., S.24ff. を参照。この講義録は目下, F. Rodi によって刊行準備中とのことであるが, 未刊である。上記のボルノーの論文中に, その内容が要約されている。
- 11) O.F. Bollnow, BHL., S.25.
- 12) O.F. Bollnow. BHL., S.23.
- 13) Otto Pöggeler, Einführung. In: *Hermeneutische Philosophie*, hrg.v.O. Pöggeler, Zehn Aufsätze, 1972. S.11.
- 14) Wilhelm Dilthey, Die Entstehung der Hermeneutik (1900). In: *Gesammelte Schriften*. V. Bd. Die geistige Welt, S.317-331.
- 15) Derselbe, Zusätze aus den Handschriften. 同上, S.332-338.
- 16) 同上, S.333.
- 17) 同上, S.334.
- 18) Pöggeler, a.a.O. S.11.
- 19) Dilthey, a.a.O. S.319.
- 20) Hans Lipps, *Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik* (以下 HL と略記), S.7f.
- 21) Hans Lipps, *Die Verbindlichkeit der Sprache* (以下 VS と略記), S.195.
- 22) Hans Lipps, HL. S.134.
- 23) Hans Lipps, HL. S.12.
- 24) O.F. Bollnow, BHL. S.29..
- 25) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1931³ Halle a.d.S. S.166.
- 26) Derselbe, a.a.O. S.165.
- 27) O.F. Bollnow, BHL. S.29f. を参照のこと。この点についてはボルノーは, リップスの極めて難解な (ボルノー教授によればドイツ人にとっても難解な) テキストから, 問題の解明に役立つ箇所を随所に指摘した。
- 28) Hans Lipps, HL. S.53.
- 29) Hans Lipps, HL. S.134.
- 30) Hans Lipps, HL. S.127.
- 31) Hans Lipps, HL. S.27.
- 32) O.F. Bollnow, BHL. S.30.
- 33) Hans Lipps, HL. S.10, 56; VL. S.114.
- 34) Hans Lipps, HL. S.69.
- 35) Hans Lipps, VL. S.103.
- 36) Hans Lipps, HL. S.10.
- 37) Hans Lipps, VL. S.212.
- 38) Hans Lipps, HL. S.13.
- 39) Hans Lipps, HL. S.59.
- 40) Hans Lipps, VL. S.195.
- 41) Hans Lipps. HL. S.53ff.
- 42) Hans Lipps. HL. S.58.
- 43) Hans Lipps, HL. S.60.
- 44) この点については, また O. F. Bollnow, *Philosophie der Erkenntnis. Das Vorverständnis und die Erfahrung des Neuen*. Stuttgart 1970.(西村・井上訳, 『認識の哲学』理想社) をも参照のこと。想念の問題は当然また, 前理解の問題へとわれわれを導くが, これを主題的に問うことは別の機会にゆずりたい。
- 45) Hans Lipps, HL. S.56.
- 46) Hans Lipps, HL. S.56f.
- 47) O.F. Bollnow, *Sprache und Erziehung*. Stuttgart 1966. S.127f. (森田訳『言語と教育—その人間学的考察』増補版, 川島書店154頁) を参照のこと。
- 48) Hans Lipps, HL. S.92.

- 49) Hans Lipps, HL. S.93.
- 50) O.F. Bollnow, a.a.O. S.138. (森田訳, 上掲書, 167頁)
- 51) O.F. Bollnow, a.a.O. S.142. (森田訳, 上掲書174頁)
- 52) O.F. Bollnow, a.a.O. S.144. (森田訳, 上掲書176頁)
- 53) Hans Lipps, HL. S.12.
- 54) Hans Lipps, HL. S.68.
- 55) Hans Lipps, HL. S.69.
- 56) O.F. Bollnow, BHL. S.33.
- 57) O.F. Bollnow, BHL. S.34.
- 58) O.F. Bollnow, Philosophie der Erkenntnis, Das Vorverständnis und die Erfahrung des Neuen. S.118f.
- 59) O. F. Bollnow, a.a.O. S.119.

LOGIK DER KONZEPTIONEN
—EINE BETRACHTUNG ZUR SPRACHLICHKEIT
DES MENSCHEN UND IHRER GESTALTUNG—

TAKASHI MORITA

Die Frage nach der Sprachlichkeit des Menschen und nach der Erziehung dazu würde, wie schon B. Liebrucks einmal bemerkt hat, in der so merkwürdigen Fortschritte zur Entsprachlichung der Gegenwart unzeitgemäß scheinen.

Aber es gab keine Zeit wie heute, wo es klar geworden ist, daß die Menschlichkeit ihre Wurzel in seiner Sprachlichkeit hat. Das ist eine sehr paradoxe Erscheinung der menschlichen Geschichte. Die Frage nach der Sprachlichkeit rückt vielfach in der zentrale Stelle in der gegenwärtigen philosophischen und auch pädagogischen Anthropologie.

Der Verfasser will hier die Bedeutung der Gedanken über Konzeptionen in den gegenwärtigen hermeneutischen Blickpunkte klar machen, die Hans Lipps in den zwanzigen und dreißigen Jahren schon entwickelt hat.